

ホトトギス

十一月号

ホトトギス

昭和二十三年三月二十八日運輸省特別優待承認証第六二七号
平成二十三年十一月一日発行（第四十四巻第一号）



俳句随想 〔三百五十三〕

汀子

俳句大会が各地で催され、様々な賞があつて表彰を受ける。そこに至る段階で選考会が開かれ、自ずから類句の問題が提起される。これは短詩型文学の宿命的な問題であつて、その是非を問う判断は選者に一任されることになる。選考会では先ずその問題から始まるのである。類句か類句ではないかということは余り神経質になることはないと思ふ。盗作は言語道断であるが、類句は出来ないほうが不思議である。同じ見方、同じ考え、表現の類似、捉え方が同じであつても不思議はない。しかしその中から名句は生まれない。

新しい発見、新しい表現を望む余り、奇異な表現をする俳句を見ることがある。言葉は大事である。日本語の美しさを発見し、追求して行けばきつと素晴らしい作品に仕上がるであらう。人の作つた俳句の表現を使うのは残念ではないか。と言つても発見した表現に特許権はない。使つていけない言葉はないが選者の判断でこれを類句とみなすかそうでないかと判断して責任を持つ。

○○の句は間もなく発表される○○賞に選んだ一句に類似している。という申出があつたが、まるで発表の早いもの勝ちのようである。そのどちら秀作ではないであらう。

旬日記

汀子

平成二十二年十一月一日 ロイヤル俳優

その香濃きこと残菊のものならず
若き志士出でたる町の秋の行く
この町をやがて包まん神渡
行秋のホテルは季節先取りす
旅多き日々として秋の逝かんとす

十一月七日 下萌旬会

往路にはなかりし歸路の冬紅葉
山荘の炉開兼ねし案内状
立冬と構へし心崩しけり
霜除の仕上つてぬし旅歸り

十一月九日 大阪倶楽部

石路の花咲けば忌日でありしか
何よりも家居の時間小六月
遅れぬて一氣に冬の紅葉かな
やうやくに色とどのへり冬紅葉
風に従ふほかはなかりけり

十一月九日 納葉倶楽部

落葉して仕尽すまでの日数かな
昨日とは違ふといへど冬日和
マロニエの落葉は朝の二三枚

十一月十一日 清交社

計画は早目早目に冬に入る
木の葉散り尽くすまで手を入れぬ
初霜の消えぬ大地を旅立ちぬ
綿虫も日向を恋うてゐる如く
初霜の消え快晴となりしかな
なほ梢を離れぬ木の葉二三枚

十一月十二日 工業倶楽部

歸り花日溜り移りをりにけり
真夜覚めて時雨るる音か風音か
十一月十三日 関西ホトトギス同人会

香を零す残菊が門つかさどる
名園といふ冬紅葉どまん中
菊園や紅葉の遅速問ふまじく
名作の苦勞話も華やける
十一月十四日 関西ホトトギス俳句大会

破蓮の静を揺らして鯉の動
百景の一つの桜紅葉これ
十一月十五日 アサヒカルチャー旬会

時雨るるも晴るるも風の意のままに
冬帝に從ふ一歩踏み出しぬ
時雨雲そのまま通り過ぎにけり
十一月十六日 有恒倶楽部

紅葉散り惜しみ惜しみてどつと散り
冬耕の一人となりて暮れて来し
手を引かれたくなきもみて七五三
はやぶさの快挙のその後小六月
十一月十六日 無名会

風のをさまりてぬし朝かな
真夜覚めて冬の星座を見に出でし
終の花の終りは知らぬまま
風に脱ぎたる雲の遠ざかる
風の葉に引つかけて花零す
風の葉の一掃したる空仰ぐ
十一月十七日 夏潮旬会

黄落のはじまる庭となりにけり
日は西へ回りにて光る冬黄葉
切干の匂ひこまざるを好まざる
どうしても読めない熟語そぞる
萩黄葉には見る距離のありにけり
はやぶさのその後のこと神の留守
十一月十八日 きざりき会

零るるは山茶花盛りなりしこと
子育ての頃の遠しや七五三
山茶花の咲きぬいつからともなくて
湯沸かして米とぎてさて旅の冬
冬の雨ありしを知らず着陣す
今宵こそ冬の流星見たかりし
十一月二十日 平成二十三年十一月十七日「ひるろく」創刊

東の空の明るき松の内
十一月二十日 「円虹」新年祝句
これよりの豊かな未来初明り
十一月二十二日 祝さむらび七百五十号

さわらびの天地豊かに冬ぬくし
十二月二十五日 「俳句王国」
芦屋市はわがまほろばよ爛熱く
十一月二十六日 時雨会

朝の雨上つてをりをぬ冬ぬくし
口切の座の一割に畏まる
招かれて正座苦手の口切に
冬ぬくしとて結局は家居して
十一月二十七日 旬会と講演の会

旅に得し景色のつづき朴落葉
忽ちといふ景色の一夜の朴落葉
息白き旅立を苦にせぬ暮し
背を伸ばしさあ出掛けねば息白く
マロニエの落葉と比べ朴落葉
十一月三十日 依頼句一併句

音といふ音をひそめて初明り
浮雲の所在告げたる初明り
星消ゆる早さにありて初明り
松風の音なく渡る初明り
十本の松影正し初明り

若かりし日々は戻らず去年今年
この筆と決め書初の墨を磨る
初夢のつづきといふはなかりけり

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十二年十一月二日 刈谷市民俳句大会

朝寒の江戸温もりの三河かな
秋惜む色に整ふ卓の上
爽やかに案内されたる喫煙所

十一月三日 虚子記念文学館投句

畑さんも小林さんも冬支度

十一月四日 蕉心会

冷まじきこの仕事こなせるやろ
そぞろ寒旅から帰り又旅へ
冬支度とはこの仕事終へてより
冬近き空サイレンの吸ひ込めり
路地に入る冬近き音遠ざけて

万両に触るる佳人の掌
館に生れ息づくものに冬近し
桃吹いて君の倅引き寄せる
十一月五日 カトリック新聞選者吟

香部屋のドア開けるより冬支度

十一月五日 「あらうみ」 諸家近詠出句

初茜百方石に染め上げて
御降も寺社を彩るものとして
加賀といふ恵方に縁深まれり
日本海の波音入れて初電話

十一月五日 藤田あけ鳥氏を偲ぶ会

ぬつと現れさうな小春でありにけり

十一月七日 野分會菅屋例会

朴落葉水漬く早さのありにけり
時雨忌の涙雨とはなりにけり

芭蕉忌や翁と呼ばれたくはなし
冬耕の背ナに六甲嵐かな
あつ危ないその袴著は一張羅

十一月八日 朝日カルチャー若草旬会

柿落葉水面は神のキャンパスに
日に星に色づけられし柿落葉
ハイヒール貫いてある柿落葉
母親の声 甲高き七五三

十一月十一日 土筆会

星になるまで鷹舞うてをりにけり
鷹の空とは青々と艶々と
日本に鷹の空あり大地あり
大綿に二次元三次元の空
大綿の虚空現となりゆけり

十一月十二日 「ひろそ火」 創刊祝句

若水を汲みて俳誌の未来祝ぐ
葉に艶を貰うて石路の花明り
黄落を待ち侘びてある大地かな
幸村の魂を鎮めて山眠る
草虱取れぬ歯痒き五十肩

十一月十三日 関西ホトギス同人会 大会

引導の鐘小春日を引つ張れり
黄落を掃いてしまはんでええやん

十一月十五日 「円紅」 新年号色紙揮毫

新しき一步淑気に踏み出せり
祇園の灯点り叡山初時雨
千歳鮎早々と食ぶ三歳児

十一月十六日 草木瓜会

初時雨止み東山現れ初むる
冬晴を繋ぎて旅の続きをり
神の留守猫はつまらなさうに鳴き

十一月十八日 登高会

冬日向雀ちよんちよん猫だらり
神の留守あなたはセコムしてますか
せつちかな商都の歩み落葉舞ふ
落葉搔ビル街の朝目覚めゆく

十一月二十一日 囲む会

石路の黄になり切つてある羽の色
黄落を拒みて凛と一樹かな
小六月今年も少女めく君に
十本に百の彩り冬紅葉
笹鳴を誘ひ出したるホルンかな
冬晴に金管の音揃ひゆく

十一月二十一日 若水旬会

浅漬や京にルーツを訪ねもし
冬耕や土の重さを諾ひも
浅漬の為の一本干し上る
晴れの国てふ山茶花の白さかな
浅漬を喜んでゐる歯茎かな
山茶花の一片散りてより暮るる

十一月二十四日 目黒学園旬会

信濃路を白く塗り替へ一茶の忌
箒目の常に正され神の留守
小春日や今宵星空期持して
二三口口説きたくなる小六月
百獣の王小春日に沈没す

十一月二十七日 ホトギス社旬会

寒灯を消してDVD佳境
山気てふ重さに朴の落葉かな
芭蕉忌や俳句の未来憂ひも
朴落葉拾ひ余生といふおふと
香を放ちつつ朴落葉ほおちば
芭蕉忌や電波飛び交ふ俳句会

十一月二十八日 野分會東京例会

雑詠

廣太郎 選

茅葺の里を縫ひゆく梅雨の傘 福知山 吉田節子
 茅葺のくらしのちらと夏座敷 同 同
 茅葺の戸毎の坂や青田風 龍ヶ崎 今橋眞理子
 筍や大きく貰ひ小さく煮る 同 同
 窓開けておく額の花見ゆるほど 同 同
 はんざきに時の流れの透き通る 同 同
 卯の花に沿うて由良川にも沿うて 芦屋 黒川悦子
 万緑に占領されて村百戸 同 同
 夜は蛩飛ぶを確信したる里 同 同
 すぐ曇るカクテルグラス夏めける 渋川 木暮陶句郎
 夏めくや海の色なる雨雫 同 同
 花婿は風花嫁はラベンダー 同 同
 鴨の子の水に濡れざる羽毛持ち 福山 竹下陶子
 俳諧の白寿の薔薇を抱けとて 同 同
 諷詠の虚子の心と青き踏む 同 同
 蜘蛛の巣に先生だけがかりけり 京都 安原 葉
 明易や旅にしあればしみじみと 同 同
 邂逅の涼しその後の消息も 同 同

百合の香に風戸惑うてをりにけり 神戸 立村霜衣
 軋むほど色濃く百合の群れをりぬ 同 同
 山百合に夕暮といふ匂ひあり 同 同
 夏の月赤く巨きく顔出しぬ 榎原 稲岡 長
 海の日の海軍カレー匂ふ街 同 同
 ナイターの虚空へ消えし打球かな 同 同
 一人来て一人の田植見てをりぬ 大版 佐土井智津子
 河骨や庫裏で電話が鳴つてゐる 同 同
 風船や空へことづて一つづつ 同 同
 大空をひよいと覗いて河骨黄 神戸 山田佳乃
 短夜や指が覚えてゐるピアノ 同 同
 幸せな泡をひとつ山椒魚 同 同
 はためきし油断に破れ苗蕉の葉 香川 湯川 雅
 寄る辺なき身を涼風に凭せ掛け 同 同
 流れにも戻る定位置あめんぼう 同 同
 早苗まだ眉のごとくにそよぎをり 熊本 岩岡中正
 睡蓮の水の中からオラトリオ 同 同
 滔滔と水切切とほととぎす 同 同
 一瀑の落つ万緑を絞り込み 奈良 古賀しぐれ
 水を生み水を落して山涼し 同 同
 耳の底耳の底へと滝落つる 同 同
 眩しさのウェストライン今年竹 東京 橋本くに彦
 客去れば水量減らす造り滝 同 同
 青空に暑さ張り付く日なりけり 同 同

雑詠句評（十月号より）

佳乃・純也・昭代
一歩・仁義・くに彦
しげ人・比奈夫・暮潮
雅　　・廣太郎

醬も亦龍野の誇風薫る 神戸 千原叡子

小京都と呼ばれる龍野は兵庫南西の街。市内を揖保川が流れ、古い武家屋敷を中心とする美しい町並みが残り、城下町の風情が漂う。鶏籠山に霞城と呼ばれる龍野城を望み、「赤とんぼ」の作者、三木露風の生誕地としても知られる。誇れるものは多い街なのだがその中でも醤油の名産地としても有名だ。

この句は龍野への挨拶句であり、同時にホトトギス同人の故浅井青陽子氏への挨拶句ともとれる。氏は先日百一歳で亡くなられた。青陽子氏もまた龍野の誇りのひとつであったと思う。

季題「風薫る」が風光明媚な龍野にふさわしく、この句をいっ

そう印象的にしている。（佳乃）

平成二十三年五月十三日に満百一才でお亡くなりになったホトトギス同人浅井青陽子様への追悼句であろう。日本、いや世界一の薄口醤油の会社の経営者として、亡くなられるまで現役を貫き通された故人への、最高の「送る言葉」として、この句は永遠に記憶される事だろう。（廣太郎）

草引いて今日お別れにならうとは たつの 三木その女

浅井青陽子様への追弔句であろう。作者は身近にお仕えしておられたから、百歳を超えられて、なお躰鏢とされていたのに、急に亡くなられたことが、納得できないようなお気持なのであろう。「草引いて」というのだから、密葬の準備でもされているのであろうか。実際に葬いの準備をしていながら、心は全くそんなことを肯っていないというような心境が、冷静に描かれている。（純也）
追悼句が続くが、作者は、浅井青陽子様の秘書をされておられた。仕事の上でも、そして俳句の上でも、文字通り公私ともに深く繋がっておられたのである。最後迄青陽子様はお元気でいらっしやうたそうだ。そうなると余計に別れの悲しみは強いだろう。淡々と悲しみが伝わってくる。（廣太郎）

（以下略）

天地有情

子選

ふるさとのしだいに恋し花みかん
短夜の月を仰ぎて離れ住む
川幅が卯浪を呼んでをりにけり
渦巻いて卯浪ぶつかり合ふところ
雲とばす東京タワー青嵐
節電に協力せんとクールビズ
芝火燃ゆ米寿のいのち美しく
思羽の彩に従ふをしの妻
梅雨入りと聞かねば知らぬほどの晴
松蟬の声に瓦礫の村遠し
岳麓の果てなき起伏青嵐
青嵐 一日満喫山の荘
生きてゐて祇園祭の空青き
真昼間の鉾町上ル下ルかな
吾に来る落花と川へ飛ぶ落花
落花飛ぶ飛ぶ吹かれ吹かれては
花少しくすみたれども気品増え
みなぎりて若木の桜とは真白

龍ヶ崎 今橋眞理子
同
東京 稲畑廣太郎
同
京都 安原 葉
同
福山 竹下陶子
同
仙台 赤川誓城
同
小金井 武井良平
同
東京 今井千鶴子
同
大阪 蔦 三郎
同
檀原 稲岡 長

徹の書に満更ならぬわが一句
子を背に乗せたる父の平泳
若竹に通ひ路改めて出来し
竹林に入り高くとび梅雨の蝶
長旅を終へ昨日今日干蒲団
炎天を喜ぶ洗濯もの干して
話したくない日の日傘深くさす
月光とふはふは遊ぶ合歡の花
溪川のさ走れる音木下闇
ほととぎす森の深さに啼き継ぎぬ
蜘蛛の囲や待つことつまり生くること
蜘蛛の囲をあぶり出したる小糠雨
短夜を来たる列車のひとつ着く
むらさきの山の風湧く花檣
仮の世の仮の傘さし河鹿聞く
ででむしの身の内透けて見ゆるかな
籐椅子のきしめば過去のよみがへる
刀自の間はなほ奥まりて夏座敷

神戸 後藤比奈夫
同
熱海 嶋田一歩
同
同 嶋田摩耶子
同
神戸 長山あや
同
吹田 宮崎 正
同
東京 内藤呈念
同
箕面 井上浩一郎
同
熊本 岩岡中正
同
神戸 三村純也
同

天地有情句評

汀子

芝火の燃えるが如きいのち。

梅雨入りと聞かねば知らぬほどの晴 仙台 赤川誓城

ふるさとのしだいに恋し花みかん 龍ヶ崎 今橋真理子

晴れていて梅雨入りと聞く。

頻りに古里が懐かしい作者の心の推移。

岳麓の果てなき起伏青嵐 小金井 武井良平

渦巻いて卯浪ぶつかり合ふところ 東京 稲畑廣太郎

富士の裾野を吹き渡る青嵐。

荒々しい卯浪。

生きてみて祇園祭の空青き 東京 今井千鶴子

雲とばす東京タワー青嵐 京都 安原 葉

祇園祭の晴れた青空を見ての感慨。

まるで東京タワーが雲を飛ばしているように見える青嵐

落花飛ぶ飛ぶ吹かれ吹かれては 大阪 蔦 三郎

芝火燃ゆ米寿のいのち美しく 福山 竹下陶子

しきりに吹かれ飛ぶ落花の風情。